

大学**アーカイブズ**

東日本大学史連絡協議会会報

1994. 12. 9 No. 11

Association of College and University
Archives of Eastern Japan

1994年7月20日(水)研究部会報告

大学史の方法 I

—第30回東日本大学史連絡協議会

研究部会報告の概要—

東海大学資料室 日露野 好章
東京大学史史料室 中野 実

大学史の編纂を担当することになって、はたと困った事があった。大学史とは何なのか。漠然とした印象しか持ちえなかった。大学の歴史を叙述すれば良いものなのか。しかしそれは、歴史学の手法にのっとる訳だから資史料がなければ記述が成り立たない。だが、その資史料とは、具体的に何を指すのか。また、研究史を集めるにしてもどこから手をつけていいのか、皆目検討がつかなかった。まして、教育学の中に大学史があった事も当時はわからなかつたのである。

こうした戸惑いを経験した事はないだろうか。そこに今回の研究会が行われた理由がある。

大学史を調べるに当たって、関連法令は、参考文献は、等々、どこを探れば疑問を氷解できるきっかけをつかむ事ができるのか、その意をこめて報告を行った。そして、もう一点は、これまでの研究会の蓄積を踏まえた上で、大学史の素地の均質化をねらったのである。それぞれの大学の中での類似性と差異を自らの個別大学史と比較する上で、より明確な姿として浮び上がらせる事ができるだろう。このように共有化した情報の上での、討論は今後の研究会をいっそう活発なものにするに違いない。

「大学史の方法」と題して報告した概要是以下の通りである。

- 1 大学史とはなにか
目録の目録 文献 資料目録 沿革史誌目録
資料論
通史
研究史
- 2 大学史料とはなにか
基本資料
法令（教育史一般を含む）
統計・年報類・年鑑・新聞・広報等
機関別所蔵資料
- 3 年表と資料作成
年表
- 4 資料解説
大学史史料集、文献目録（国立、私立別）
関連団体
これらのすべてを本紙面に紹介するのは不可能であり、かつ当日までに精査できなかつた。たとえば「2 大学史料とはなにか」の機関別所蔵資料（国立公文書館、都道府県の公文書館・図書館、文部省、私立大学連盟等）などがあり、また「4 史料解説」の大学史史料集、文献目録（国立、私立別）はもうすこし体裁を整えたい、などの報告者の希望もあるので、研究史を除いた「1 大学史とはなにか」の概要を記す。

目録の目録

文献・資料目録としては、まず戦後刊行された国立国会図書館調査立法考查局編『大学

の自由に関する文献目録』1952（昭和27）年、がある。単著ばかりでなく雑誌論文も収録しており、先駆的成果として数えられる。雑誌に掲載されたものとしては伊藤恒夫「『大学改革』に関する文献解題」『思想の科学』1966（昭和41）年4月、が早いものであろう。これ以降多くの雑誌等で大学問題が取り上げられていくがここでは割愛した。本格的な大学史の文献目録としては、寺崎昌男「大学史文献目録－日本の部」日本教育学会『教育学研究』第32巻第2・3合併号、1965（昭和40）年、「遺補」1966（昭和41）年、同誌、椎名万吉「大学文献目録－欧米の部」（同前誌）がある。いわゆる大学紛争後、多くの文献目録が刊行された。国立教育研究編『大学教育に関する比較研究』（大学の理念に関する文献解題）1972（昭和47）年、もその一つである。このほか学生問題に関する文献目録も刊行されていた。それらが一段落したのち、大学史のみを対象としているわけではないが、大学関係の目録としては中野実「大学改革の文献・資料リスト」『日本の大学改革Ⅰ』付属資料、1982（昭和57）年、日外アソシエーツ編『大学教育・大学問題に関する10年間の雑誌文献目録』1984（昭和59）年、がある。

このほか全国主要大学・公共図書館に所蔵されている、大学ないし高等教育に関する欧文文献の所在目録として中山茂・横尾壮英『大学に関する欧文文献総合目録』1970（昭和45）年、財団法人学術書出版会、という貴重な文献がある。大学紛争後は多くの場で、大学（史）関係の雑誌新聞記事あるいは文献目録が作成され、公刊されたが、それ以後はなかなか継続的に刊行されてはいない。そのなかでたとえば、早稲田大学企画調整部・大学問題研究資料室編『大学関係雑誌等記事文献目録』1981（昭和56）年、は注目される。

ところで時として、戦前期日本の大学史関係の雑誌記事について聞かれることがあるが、残念ながらまだ体系的な目録はない。さきに掲げた目録にも若干はのっているが、すべてではない。総目次が作成されている総合雑誌も少なくないのだから、是非とも今後の課題としたい。その際に活用できる文献が最近刊行された。それは教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』（全101巻、



報告する中野氏（左）、日露野氏

日本図書センター）である。教育関係との限定はあるが、『大学評論』『大学及大学生』などが含まれており、大きな助けになる。

最近の大学史関係の文献を知るには、かなりの労力がいる。まとまっていないのである。まずは日本科学史学会編『科学史研究』である。1965（昭和40）年から年次文献目録を掲載しており、大学史関係文献がある。さらに会員の自己申告に基づいて作成されているのが、日本教育社会学会編『教育社会学研究』（年次文献目録、高等教育）、広島大学大学教育研究センター「コリーグ」（年一回、高等教育文献目録を発行）、である。しかし後者の2つは大学史に限定されているわけではない。なお、大学史研究会もかつて大学史関係文献目録を作成していたが、現在は休止している。

なお、戦後の大学史の目録としては、当日は戦後教育資料収集委員会編『戦後教育資料目録』1965（昭和40）年、G H Q / S C A P 文書（国立国会図書館政治史料課）を掲げたが、佐藤秀夫編『海外学術研究報告書 占領期日本教育に関する在米史料の調査研究』（国立教育研究所、戦後教育改革資料6）、1988（昭和63）年3月、を追加しておきたい（なお、本誌第8号には佐藤氏「戦後教育改革に関する資料と研究」の講演記録がある）。

沿革史誌目録としては財団法人野間教育研究所日本教育史研究部門編『野間教育研究所所蔵 学校史誌目録』1986（昭和61）年度版、がある。当初、寺崎昌男『大学・高等教育機関の沿革史（修訂版）附野間教育研究所所蔵沿革史誌目録』1973（昭和48）年、として刊行されて以降継続的に発行されており、かつ中等教育機関以下の機関も含めるようになった。日本ではもっともまとまった目録である。個人としては中村博男編『本邦大学・高等教

育機関沿革史目録』日本図書協会、1978（昭和53）年、がありこれ以降増加分の刊行もある。このほかに東京女子大学付属比較文化研究所編『比較文化研究所所蔵書目録』日本における大学沿革史』1979（昭和54）年、早稲田大学史編集所編「早稲田大学所蔵 各大学史関係図書目録」『早稲田大学史記要』1993（平成5）年、などがある。また大学基準協会編『会報』（60号）でも受贈大学年史等目録を掲載し、以後ほぼ年次報告となっている。国立国会図書館参考室でも最近、大学沿革史関係のカード・ボックスを設けている。大学沿革史誌類は、学校沿革史誌類とともになかなか目に付きにくく、配布が限定されがちである。そのため、完璧を期するには最低限、各機関の編纂室、史料室などが出しているニュース類の受贈図書目録までの射程に入れておかなければならぬだろう。

資料論

資料論としては以下の文献を掲げた。『日本古文書学講座』第9巻 近代編I 公文書Ⅲ（各省文書）文部省（佐藤秀夫）、雄山閣、1979（昭和54）年、同講座第10巻、近代編II

文化関係文書 学校教育（寺崎昌男）、民間教育（田嶋一）、私学教育（佐志伝）、1980（昭和55）年。なお、前者に関わって1984（昭和59）年の文部省公文書移管分については本誌第6号、米田俊彦「国立公文書館所蔵文部省公文書の追加公開」を参照のこと。さらに、以下の2つの研究入門書を紹介した。中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門』1977（昭和52）年、東大出版会、中山茂・石山洋編『科学史研究入門』1987（昭和62）年、同前。後者には第II部文献案内 2文献目録・解説に「大学史」がある。

通史

通史としては取り敢えず、以下のものを掲げておこう。

文部省編『学制百年史』本史・資料編の2巻構成（昭和47年）本史・資料編の2巻構成、本史の各時期に高等教育の項が置かれる。

国立教育研究所編『日本近代教育百年史』（学校教育編・高等教育・大学教育、大学予備教育、専門教育、教育研究振興会）1974（昭和49）年。

個人の業績としては、古代から大正期まで

を叙述した大久保利謙『日本の大学』1943（昭和18）年、創元社、海後宗臣・寺崎昌男編『戦後日本の教育改革』第9巻（大学教育）東大出版会、寺崎昌男『日本における大学自治制度の成立』1979（昭和54）年、評論社、天野郁夫『近代日本高等教育研究』玉川大学出版会、1990（平成2）年、寺崎昌男『プロムナード東京大学史』東大出版会、1992（平成4）年などがある。欧米の大学を含めた通史としては梅根悟監修『世界教育史体系 第26・27巻 大学史I、II（全2巻）』1974（昭和49）年、講談社、寺崎昌男・成田克矢編『学校の歴史』第4巻（大学の歴史）、1979（昭和54）年、第一法規出版がある。このほかに広重徹『科学の社会史－近代日本の科学体制』1973（昭和48）年、中央公論社も掲げた。

このほか、通史ではないが大学史編纂にかかる、東大、早大、同志社、明治学院、学習院、慶應の各大学史編纂者によってその特色と課題を語っている座談会「大学史の編纂とその課題」『三田評論』1976（昭和51）年もある。さらに都道府県（教育）史のなかで言及されている例として、『静岡県史』資料編20「第4編教育・文化」の項に航空科学専門学校認可申請書が載せられている東海大学を紹介した。

以上、今回の報告にあっては、日露野と中野とが所属する史資料室に所蔵されている資料を中心にまとめた。そのため多くの漏れ落ちがあると思われる。会員諸氏からのご指摘をいただきたい。

さらに付言すれば、この報告は今後、研究会のなかに大学史に関する情報収集や企画を自由に懇談する場を設けたい、との願いから生まれたものであった。恒常的になるか、断続的になるかいまだ未知数であるが、ワーキング・グループを設けてみたいと思う。これらの活動を踏まえて、「大学史の方法」の完璧を期したい。

なお、当日の質問のうち、戦後直後の大学設置に関する許認可文書と占領軍文書（GHQ/S C A P文書）中の大学関係資料の体系的調査については、この研究部会が最大の関心を払うべき課題の一つであることは間違いない。

1994年3月18日（金）研究部会報告

「『東海大学五十年史』の編纂について」を聞いて

東海大学50年史編集委員会 日露野 好章

1994年（平成6）3月18日、第29回東日本大学史連絡協議会研究部会が、千代田区霞が関にある東海大学校友会館において行われた。

東海大学は、1992年（平成4）11月1日に建学50周年を迎える、その記念事業の一環として、東海大学50年史編集委員会による『東海大学五十年史』の編纂が行われた。

今回は、これに関する報告が行われたが、まず、研究部会の開催に先立って、編集委員会の上部組織である刊行委員会委員松前紀男東海大学学長から挨拶があった。

そこでは、松前学長自身の経験を踏まえた大学史への想いが披瀝された。大学史に何を書くか、その主題となるべき記述事項の選択、着眼点の難しさ、編纂された年史の記述が資料となり一人歩きを始めるこわさなどが語られた。特に現状では日本の大学史が、記録の保存という消極的な側面でしか利用されていないのではないか、という反省をこめた批判が述べられた。

これらは個別大学史が学問として昇華しきれないでいる問題点に言及したものと言えるだろう。

次いで50年史編集委員会委員長尚樹啓太郎文学部教授から報告がなされた。

その大要は、東海大学における、これまでの大学史編纂の紹介、50年史編纂事業に関する学内組織、編纂経過及び編纂に際して特に留意した三つの事項などであった。以下に、その内容を記すことにする。

まず、本学年史の編纂は、建学20周年（1962年）、30周年（1972年）、40周年（1982年）、それに今回の50周年と10年毎に行われた。このうち20周年の時のものは、『回顧と前進－東海大学建学の記』と題された、創立者松前重義による個人の著作であった。このあと、それぞれ『三十年の歩み』、『東海大学建学史』と題する年史が刊行されている。しかしこれ



尚樹啓太郎先生の報告

らは、いずれも小規模な編纂組織によって作成されたものであったが、今回の『東海大学五十年史』（通史篇・部局篇、以下『五十年史』と記述する）は、編纂組織の規模及び記述の内容からいっても、東海大学としては、これまでにない編纂体制を敷いたのであった。

前述の如く建学50周年記念事業の一環として始まった本学の年史編纂の組織は、建学50周年記念事業委員会のもとに刊行委員会があり、その下部に編集委員会が設置されるというものであった。編集委員会は9名の委員と1名の編集員から成り、主に歴史学系教員から構成され、1989年（平成元）4月1日付けで法人から委員の委嘱状が交付された。また、編集委員会とは別に、編纂事務全般と資料収集・整理等を業務とした50年史編纂室（のちに記念事業室に吸収）が代々木校舎（渋谷区富ヶ谷）に置かれた。編纂室には法人職員2名、東海教育研究所から出向職員2名、合計4名で事務局を組織し、順次アルバイトの増員をはかり、『五十年史』編纂終了時には4名を雇用していた。

編集委員は本務の傍らの作業であったこと、及び1992年（平成4）11月1日が創立50周年記念式典の日であり、編纂完了がこの期日から大きく遅れることがないようにという法人本部からの要請があったことから、編纂作業

はハードスケジュールとならざるを得なかつた。

編集委員会は、資料収集、年表事項の検討、年史の執筆と並行して、建学を記念して配布すべきものとして、1994年（平成4）9月17日に『図録 東海大学50年』の編纂を終えた。そして直ちに『五十年史』に着手した。

通史篇は、「図録」本文の時代区分を採用しつつ、記述資料の充実を図り、これまでに刊行された年史記述の訂正を行った。また、年表は一般とスポーツとにわけられ、前者の事項には出典を明記した上で、年史記述への根拠を与えた。特にスポーツ年表を設けたのは、学園一般事項と併記することによる煩雑化を避けると共に、学園の発展と並行して盛んとなったスポーツ分野を明示するためだった。

これらはすべて編集委員会での編纂方針に
あった「日本現代史における学園の位置づけ」
への試みにはかならない。編集委員会は、共
同討議を旨として、できるだけ記述の偏りを
なくすことに努めた。そのため執筆担当箇所
への執筆者の明示を避け、編集委員会全体の
責任として上梓した。

次いで部局篇だが、本学には74の部局がある。それぞれの巻末には年表を付した。この部局篇の中には既に改組、廃止された部局も含まれている。これは本学園の歴史を語る中で、時代の要請によって生まれたそれら部局がはたした役割を残したかったからである。全学の協力のもとで、年史を作成するという本旨の中での作業であったが、このことからも部局篇の刊行はなくてはならない作業だった。1990年（平成2）3月27・28日の両日、部局担当幹事への執筆説明会をそれぞれ湘南と代々木の各校舎で実施した。その後、1992年（平成4）5月から徐々に原稿が入稿され始めたが、74部局が揃ったのは、1993年3月の終わりだった。その間、編集委員会では分担して部局の原稿を読み合せ、事実誤認による記述の訂正や用語の統一などを行った。そして10月になってようやく完成原稿となったのである。

終りに、尚樹教授は『五十年史』の特色を三点あげている。まず第一点は、序章を設けて、そこに創立者松前重義の伝記を記したことである。建学50周年を前年にひかえた1991年（平成3）8月25日、享年89歳で逝去了。

創立者への追悼とともに、今後、学内で繰り返し論じられるだろう松前重義研究の先鞭をつけんがための章であった。第二点目は、私学としての特徴をあらわす建学の精神について、特に章を設けて論じたことである。それは東海大学における建学の精神が、ある時期に創立者によって、これだといって示された



ものではなく、長い時間をかけて練られ、創り上げていったものの、すなわち形成されたものだ、と言えるからである。そのため創立者松前重義の足跡を丹念に尋ねる作業が必要となる。松前の思想の背景は何だったのか。そして事象となって現れた数々の行動の帰結は何を意味しているのか。一つには技術者運動と国防理工科大学への構想、そして1947年(昭和17)12月8日、財団法人国防理工学園の創設から航空・電波両専門学校の開校、終戦を挟んで東海科学専門学校、旧制大学から新制大学へという系譜がある。また他方には、内村鑑三との出会いからデンマーク・グレンントヴィの国民高等学校教育への傾倒、そしてこれが教育実践の中で望星学塾、英世学園へと結実していく。そこには、国家教育の枠組みの中と、キリスト教主義に基づく私塾教育の流れを読み取ることができる。ともに同一人物からなる教育活動であった。加えて敗戦という大きな潮流を身に受けた松前を見ることができ。これらの教育的事象は、それぞれの因果関係の中で読み取り、これに時代という人間が受ける時間的制約の壁を加味することによって、建学の精神を考えて行かなければならぬ。その試みを『五十年史』で行ったのである。第三点として、一大学の学園史は一大学の歴史を語れば良いのではなく、その背景となっている時代と共に語らなければ

ばならないと、これから大学史が求められる姿勢について言及し、報告を終えた。

東海大学における年史の編纂は、報告に述べられているように、記念事業という性格を持つ、制約された作業であった。そのため記念事業の終了は、年史編纂の幕切れをも意味している。しかし、これに続く年史編纂が将来行われるであろうことを考えると、学園としてどのような体制を構築して行くべきか、大きな問題である。

個別大学史はその学園を知る一つの試金石といえないだろうか。大学の個性が呼ばれる中で、その個性をかたちづくってきたものは歴史にほかならない。そして、それを証し、時の証言台に立たせるのは、その大学史にはかないない。

東海大学50年史編集委員会が、今後の大学史についての資料の収集と保存等の要望書を法人宛てに提出し、その役割を終えたのは、1994年3月29日であった。

1994年1月20日(木)研究部会

講演…網野善彦氏「資料学をめぐる諸問題」について

神奈川大学大学資料編纂室 澤木武美

1994年1月20日(木)の第28回研究部会は、神奈川大学短期大学部の網野善彦教授を講師にお迎えし「資料学をめぐる諸問題」と題する講演会を開催した。当日の参加者は21大学・2個人会員の計30名であった。

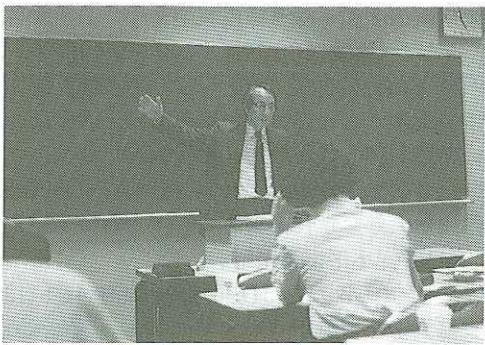
網野先生は、ここで改めて紹介するまでもないが、近年、新たな視点から日本の歴史を読み直し、きわめて刺激的な研究成果を相次いで発表され、歴史学のみならず多くの研究分野の人々から注目を集めている日本中世史、日本海民史の研究者である。今回の講演で先生は、ご自分の名古屋大学文学部在職中の大学史編纂の経験をmajieながら先生と歴史資料、とりわけ先生が大学卒業後初めて携わった日本常民文化研究所での資料との関わりを中心に述べられ、資料学の確立の必要性を訴えられた。

日本常民文化研究所は、渋沢栄一の孫、渋沢敬三が1925(大正14)年に自邸に創設したアチック・ミューザムを母体として生まれ、民具、そして漁業史の研究を中心に進めてきた民間の研究所である。同研究所は、戦後1949年から水産庁の委託を受け、漁業制度改革に伴う漁業制度資料の調査・収集を進めた。その翌年、先生は宇野修平氏が責任者を務めていたこのスタッフの一員となり、日常業務

として資料整理に取り組むこととなった。この仕事の過程で現在も継続して調査・研究が進められている先生と奥能登時国家文書との関わりが生まれる。

網野先生は、奥能登時国家文書が当時の研究所スタッフの資料整理、資料集刊行という仕事に対する見通しの甘さから一部の資料が所蔵者へ返却されないまま放置されてしまった経緯を詳細に述べられるとともに、その返却の仕事が研究所の神奈川大学日本常民文化研究所として再発足(1982年)以降にまで持ち越されたこと、その返却の仕事が契機となって時国家から新たに厖大な文書群が発見され、新しいスタッフによる時国家調査・研究が再開されたことを具体的に語られた。30年以上にわたる借用資料の返却(補修・整理の上)が、資料所蔵者と調査・研究者の新たな相互理解を生み出し、埋もれていた資料群をよみがえらせることになったのである。

こうして再開された奥能登時国家調査は今年で10年目を迎えたというが、ここでの調査方法で私たちにとって興味深いのは、資料目録の作成を年代順に資料を配列する編年目録としたことである。先生によれば、分類基準自体が現状の学問水準に制約され、将来にむけ不十分なものとならざるを得ないことからこ



講演する網野善彦先生

の方針が採用されたという。

また、この調査・研究の特色の一つは、奥能登時国家という地域、そして特定の家の総合調査・研究を進めている点である。この文書を扱う文献史学・古文書学、書籍を扱う書誌学、さらに民俗・民具学、建築史、そして考古学などの分野の専門家による総合調査・研究によって各分野においても大きな成果をあげることができたが（この調査・研究の成果の一つとして今年夏から刊行が開始された『奥能登と時国家』全5巻、平凡社、があげられる）、一方では異なった資料を対象に異なる方法によって進める各分野の共同調査・研究は非常に難しく、様々な問題を生み出すことにもなったという。こうした問題を解決し、総合調査の成果をより高めるためには、それぞれの学問分野における徹底した資料批判とその方法を確立し、自から扱う資料の限界を認識し、他分野における研究方法、対象資料の特質を理解することが求められるとする。こうした意味からもそれぞれの分野での資料学の確立が要請されているのである。

また、網野先生は、すでに約20年前に名古屋大学文学部在職中に学部の教官有志で総合資料学研究科の設置を計画したが、実現に至らなかったことを述べ、それが、こうした資料学の確立を要請する動きのなかで現在、奈良大学や神奈川大学の大学院に資料学を研究教育する課程が生れていることを指摘された。とくに、日本常民文化研究所の活動を通して設置された神奈川大学の独立大学院「歴史民俗資料学研究科」については、そのカリキュラムを示され、文献史料学、民俗・民具資料学の二つの系からなる研究科の概要を説明された。近年、各地に設立されている歴史資料

館、文書館、民具民俗館などの多用な施設において、実際にその施設を動かしていく人材を組織的・系統的に養成するためにも総合的な資料学の体系化が必要とされているのである。

さらに網野先生は具体的な事例をあげ、私たちに資料の調査、収集、整理、修復、そして保存、公開に至るまでの様々な問題点を、ご自分の現場での体験をもとに示され、そこで出会った資料がどのような意味をもつものであったかも明らかにされた。とくに奥能登上時国家の襖の下張り文書から、これまで蔵にきちんとした形で残されていた文書からはわからなかった新たな実態が判明した例をあげ、廃棄されようとした資料自体が語る意味、そしてそれらの資料によって日本の歴史が読み直していくことを興味深く話され、講演を終えた。

先生の講演は、資料学の確立の必要性を具体的に展開されたものであったが、資料の収集、整理、保存・公開を日常業務とする私たちにとってきわめて示唆に富んだものであり、改めて自分自身の資料への関わりを見直すことになった。大学史という限定された分野とはいえ、そこで生み出される資料は、文献資料はもとより写真、教材、制帽、旗、レコード、バッヂなど非常に幅広く、そしてそれぞれの大学の創立趣旨、経緯によって資料の内容も大きく異なっている。こうした資料の共通理解をはかる試みとして本会や西日本大学史担当者会の活動が始まったといえる。今回の講演を聞いて学んだことは多岐にわたるが、私たちが取り組むべき大学史資料に対する共通の理解を得るための作業もまた多くの時間を必要とするというのが実感であった。今後、研究部会などで具体的な資料をもとに相互の共通理解をはかるとともに、大学史資料の徹底した資料批判を日常業務のなかでそれが進めていくことが求められているのである。今回の講演で再三ふれられた日本常民文化研究所は現在大学の付属機関である。この意味では研究所、そしてそこに携わる人々もまた大学史の対象であり、その活動と生み出される成果もまた大学史資料といえる。私もこうした貴重な資料をもとにさらに多くのことを学びたいと思う。

東日本大学史連絡協議会会員名簿
(1994年5月25日現在)

(会員校・担当部課室)

愛知大学・愛知大学50年史編纂委員会
〒441 豊橋市町畠町1-1
☎0532-47-4138 FAX 0532-47-4132

学習院大学・学習院大学史料館
〒171 豊島区目白1-5-1
☎03-3986-0221(内6569) FAX 03-5992-9219

神奈川大学・大学資料編纂室
〒221 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
☎045-481-5661 FAX 045-481-9300

関東学院・学院史資料室
〒236 横浜市金沢区六浦町4834-1
☎045-786-7049 FAX 045-786-0787

慶應義塾・福澤研究センター
〒108 港区三田2-15-45
☎03-3453-4511(内2628) FAX 03-3769-1564

國學院大学・校史資料室
〒150 渋谷区東4-10-28
☎03-5466-0104 FAX 03-5485-0152

国際基督教大学・広報課大学史編纂室
〒181 三鷹市大沢3-10-2
☎0422-33-3057 FAX 0422-33-9887

国士館大学・国士館資料室・理事長室広報課
〒154 世田谷区世田谷4-28-1
☎03-5481-3118・5340 FAX 03-5481-3208

実践女子大学・入試・広報課
〒191 日野市大坂上4-1-1
☎0425-85-0311

上智大学・史料室
〒102 千代田区紀尾井町7-1
☎03-3238-3294 FAX 03-3238-3539

成蹊学園・総務部学園史料館事務室
〒180 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
☎0422-37-3517 FAX 0422-37-3868

専修大学・年史資料室年史資料課
〒101 千代田区神田神保町3-8
☎03-3265-6211

拓殖大学・創立百周年記念事業事務室
〒112 文京区小日向3-4-14
☎03-3947-2261 FAX 03-3947-5333

玉川大学・教育博物館学園史料室
〒194 町田市玉川学園6-1-1
☎0427-39-8643 FAX 0427-39-8654

大乘淑徳学園・総務部広報担当
〒174 板橋区前野町6-32-1
☎03-5392-8801 FAX 03-5392-8800

中央大学・広報部大学史編纂課
〒192-03 八王子市東中野742-1
☎0426-74-2132 FAX 0426-74-2148

津田塾大学・学長事務室
〒187 小平市津田町2-1-1
☎0423-42-5113 FAX 0423-42-5112

東海大学・資料室
〒151 渋谷区富ヶ谷2-28-4
☎03-3467-2211 FAX 03-3485-4962

東京基督教大学・歴史資料保存委員会
〒270-13 千葉県印旛郡印西町内野
3丁目301-5-1
☎0476-46-1131 FAX 0476-46-1405

東京経済大学・学長室
〒185 国分寺市南町1-7
☎0423-21-1941 FAX 0423-24-1354

東京女子医科大学・大学史料室・吉岡彌生記念室
〒162 新宿区河田町8-1
☎03-3353-8111(内22213) FAX 03-5269-7402

東京農業大学・図書館
〒156 世田谷区桜ヶ丘1-1-1
☎03-5477-2525 (DI) FAX 03-5477-2632

東北学院大学・広報室
〒980 仙台市青葉区土樋1丁目3-1
☎022-264-6423 FAX 022-264-6458

東洋大学・井上円了記念学術センター
〒112 文京区白山5-28-20
☎03-3945-7555 FAX 03-3945-7601

獨協学園・百年史編纂室
〒340 草加市学園町1-1
☎0489-42-1111 FAX 0489-42-6756

日本工業大学・総務課
〒345 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1
☎0480-34-4111(代) FAX 0480-34-2941

日本女子大学・成瀬記念館
〒112 文京区目白台2-8-1
☎03-3942-6187 FAX 03-3942-6187

日本大学・大学史編纂室
〒102 千代田区九段南4丁目8-24
☎03-5275-8036 FAX 03-5275-8325

法政大学・多摩図書館資料課
〒194-02 町田市相原町4342
☎0427-83-2281 FAX 0427-83-2266

宮城学院女子大学・宮城学院資料室
〒981 仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1
☎022-279-7765 FAX 022-279-7566

武蔵学園・企画室
〒176 練馬区豊玉上1-26-1
☎03-5984-3703

武蔵野美術大学・大学史史料室
〒187 小平市小川町1-736
☎0423-41-5011 FAX 0423-42-6544

明治大学・総務部歴史編纂事務室
〒101 千代田区神田駿河台1-1
☎03-3296-4085~6 FAX 03-3296-4087(広報部)

立教大学・図書館大学史資料室
〒171 豊島区西池袋3-34-1
☎03-3985-2693 FAX 03-3985-2819

立正大学学園・企画広報室
〒141 品川区大崎4-2-16
☎03-3492-5165 FAX 03-5487-3340

早稲田大学・大学史編集所
〒169-50 新宿区西早稲田1-6-1
☎03-3232-5668 FAX 03-5286-1815

個人会員
(*印の住所は勤務先)
安藤 正人(国立史料館)
〒253 茅ヶ崎市堤36-1 ☎0467-53-4142
石原 一則(神奈川県立文化資料館)
〒247 鎌倉市大船5-13-21-404
☎0467-46-2104

東日本大学史連絡協議会
1994年度総会議事録(抄)

日 時 1994年5月9日(月)14時~15時
場 所 中央大学駿河台記念館510号室
出席校 29大学 7個人会員(計45名)
開会の挨拶 会長校 中央大学 浜松 晃氏
議長の選出 議長 國學院大学 益井邦夫氏
副議長 慶應義塾 宮城 勇氏
議 事 1. 1993年度事業報告・同決算報告
について(承認)
2. 1994年度事業計画案・同予算案
について(承認)
3. 役員の選出について(承認)
※参考 1994年度役員校
会長校 明治大学

大沢 泉(八戸大学商学部)
〒031 青森県八戸市大字美保野13-118
八戸大学教員宿舎B-6
☎0178-25-5651

小川千代子(国際資料研究所)
* 〒108 港区高輪4-15-2 ☎03-3443-7328
北村 和夫(聖心女子大学文学部教育学科)
* 〒150 渋谷区広尾4-3-1 ☎03-3407-5811
小林 愛子(上智大学聖三木文庫)
〒130 墨田区吾妻橋3-11-10-602
☎03-3238-3545

高木 雅史(名古屋大学史編集室)
* 〒464-01 名古屋市千種区不老町
☎052-789-2048

寺崎 弘康(神奈川県立博物館)
* 〒231 横浜市中区山下町54
神奈川県庁山下町分庁舎第2別館
☎045-201-0926

傳農 和子(青山学院資料センター)
☎03-3409-8111(内2215)

〒112 文京区千石3-29-16、5A
☎03-3946-2808

中野 実(東京大学大学史史料室)
☎03-3812-2111(内2036・2077)

〒171 三鷹市深大寺3-7-20 ☎0422-33-8356

細井 守(藤沢市文書館)
* 〒251 藤沢市朝日町12-6 ☎0466-24-0171

水口 政次(東京都公文書館)
* 〒105 港区海岸1-13-17 ☎03-5470-1334

副会長校	中央大学
	東海大学
常任委員校	神奈川大学
	慶應義塾
	國學院大学
	国際基督教大学
会計委員校	玉川大学
	成蹊学園
監査委員校	日本工業大学
	日本大学

4. その他

閉会の挨拶 会長校 中央大学 村松良人氏
懇親会 15時~16時30分 出席者39名

常任委員会議事録(抄)

第42回 1994年3月18日(金)13時30分~15時

会 場 東海大学校友会館
出席校 神奈川大学 國學院大学 国際基督教大学 成蹊学園 玉川大学 中央大学 東海大学
議 事 (1)1994年度事業計画について
(2)その他
第43回 1994年4月28日(木) 14時~16時
会 場 中央大学駿河台記念館470号室
出席校 神奈川大学 國學院大学 国際基督教大学 成蹊学園 玉川大学 中央大学 東海大学 日本工業大学
日本大学 明治大学
中野実(会報編集担当)
議 事 (1)1994年度総会について
(2)その他(学習院大学史料館の本協議会入会を1994年4月1日付で承認する)
第44回 1994年5月9日(日)13時30分~14時
会 場 中央大学駿河台記念館510号室
出席校 神奈川大学 國學院大学
国際基督教大学 成蹊学園
玉川大学 中央大学 東海大学
日本工業大学 日本大学 明治大学
議 事 (1)1994年度総会について
第45回 1994年7月20日(水)13時~14時
会 場 中央大学駿河台記念館580号室
出席校 神奈川大学 慶應義塾 國學院大学
玉川大学 中央大学 東海大学
日本大学 明治大学
議 事 (1)1994年度常任委員会の運営について
(2)1994年度合同研究部会について
(3)その他

研究部会記録(抄)

第29回 1994年3月18日(金)15時~16時30分
会 場 東海大学校友会館
参加校 19大学 計30名
報 告 尚樹啓太郎氏(東海大学文学部教授)
「『東海大学五十年史』の編纂について」
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した東海大学50年史編集委員会・日露野好章氏の「『東海大学五十年史』の編纂について」を聞いてをご参照ください。
第30回 1994年7月20日(木) 14時~16時
会 場 中央大学駿河台記念館580号室
参加校 20大学 3個人会員 計31名

報 告 中野 実氏(東京大学大学史史料室)
日露野好章氏(東海大学資料室)
「戦後大学史研究の成果をめぐって」
※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した「大学史の方法Ⅰ」をご参照ください。

■ 三二情報 ■

※『中央大学百年史編集ニュース』

第22号 1994年11月刊行

松崎彰「大学史資料としての表具」と1994年1月から6月までの収集資料を紹介。

『中央大学史資料集』第13集と『中央大学史紀要』第6号は、1994年度末に刊行予定。

(中央大学広報部大学史編纂課)

※『國學院大學百年史』上・下巻刊行

國學院大学では、今年『國學院大學百年史』上・下巻を刊行した。上巻は第一篇皇典講究所の創立期から昭和初年まで、下巻は第七篇戦時期の本所本学から現況まで(A5判、上・下巻1672頁)が収録されている。刊行までに10年の歳月をついやしたという。

※「武蔵学園記念室」開設

武蔵学園では、本年4月、学園史に関わる資料の収集・整理・保存とそれらの公開・展示などを行う「武蔵学園記念室」を開設した。

(以上の紹介は本会報編集担当者)

■ ご案内 ■

本協議会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記事務局へご連絡ください。

〈事務局〉

中央大学広報部大学史編纂課

〒192-03 東京都八王子市東中野742-1

☎ 0426-74-2132

会報編集担当

神奈川大学大学資料編纂室

〒221 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

☎ 045-481-5661

東海大学資料室

〒151 渋谷区富ヶ谷2-28-4

☎ 03-3467-2211

中野 実(東京大学史史料室)

〒113 文京区本郷7-3-1

☎ 03-3812-2111